



# 西覚寺だより

特別号

年三回発行

## ▼永代経法話のかわりに

新型コロナウイルスが世界的に猛威をふるっています。みなさまも十分にお気を付け下さい。

私たち人類は、幾度となく感染症をはじめ、さまざまな災害、自然の脅威にさらされてきました。それは親鸞聖人が生きられた時代も同じです。親鸞聖人のお連れ合い、恵信尼さまのお手紙の中にこんなお話が残されています。

親鸞聖人は29歳で比叡山を下り、法然聖人のもとで阿彌陀さまのお念仏の教えに皈依され、そして越後に流罪になる。その後、親鸞聖人がご家族と共に、当時の越後国から常陸国へ旅路を進める途中、上野国の佐貫（さぬき）へと立ち寄り、た際のお話です。以下、取意。

「その年は全国的に地震、干ばつ、飢饉に洪水など様々な災害が起き、佐貫の地でも多くの民人が苦しんでいた。親鸞聖人はその民人を見て、浄土三部経（仏説無量寿経・仏説観無量寿経・仏説阿彌陀経）を千回読誦しようと思ひ立てられた。それは苦しむ人々を救うために。幼き頃から仏教を学ばれた比叡山での修法に則り。しかし、四、五日して、思い返して読むのをやめられました。」

というようなお話です。今の世界情勢にあてはめれば、新型コロナウイルスで亡くなられた方を偲び、またウイルスがおさまるように祈禱する、そんなようなことかもしれません。

でも、聖人は途中でやめられた。何故か。親鸞聖人ご自身の回想として、こんなお言葉が続きます。

「南無阿彌陀仏のお念仏ひとつで救われる道を自ら歩むものとして、そしてそれを人に伝えていく事が阿彌陀様のご恩に報いる事と信じていながら、何が不足でお経を読もうとしたのかと。」

先に述べた浄土三部経には、「阿彌陀様が阿彌陀様と成られた由縁」や「お浄土の様相等とともに、「お念仏ひとつでこの私が救われる。この私が浄土に生まれ仏と成り、無量の命、無量の光と成らせて頂く」という大切なことが説かれています。そのお経の中身と関係のない、「天災が鎮まるよう加持祈禱すること」に、お経を転用しようとしたご自分に愕然とされたかもしれません。まだ自らの力をたのみ、過信する心が残されているのか。そもそも、のちの世の私たちに、加持祈禱などを厳しく戒められた方が親鸞聖人です。お念仏によってすでに救われているわが身に、何の不足があるのか。加持祈禱するのはなく、南無阿彌陀仏を伝えることこそ、人々の救いとなるのだと、思われたのです。親鸞聖人が残されたご和讃に、このような一首があります。

「南無阿彌陀仏をとらふれば

十方無量の諸仏は

百重千重圍繞（いにょう）して

よろこびまもりたまふなり」

（『浄土和讃』 現世利益和讃より）



阿彌陀様は、私たちを救うために「南無阿彌陀仏」の仏さまと成られました。「南無阿彌陀仏」が阿彌陀様なのです。南無阿彌陀仏とともに生きる人は、この世ですでに阿彌陀様と一緒に生きています。私の限りある命が阿彌陀様の無量の命と一体となっていきます。体は尽きても仏と成る、「死なない」いのちを頂くのです。

そして、南無阿彌陀仏とともに生きる、阿彌陀様とともに生きる私たちを、ありとあらゆる世界の数限りない仏様たちが、「よろこび」「おまもり」くださるので、この「まもる」というのは、病気や災難から守るということではありません。百重にも千重にもなつて、この私の命を祝福してください。あなたも私たちと同じである、阿彌陀仏を喜ぶ身である」と。私が「南無阿彌陀仏」と称えれば、仏様方も「南無阿彌陀仏」とこたえて下さるのです。私の周りは、数多くの仏様に取り囲まれ、まもられているのです。いったい何の不足がありますか。

今、世界は先の見えない状況で、私たちも不安の中にいます。私たちにいったい何が出来るでしょうか。ひとりの力には限りがあります。できることをコツコツと頑張る他ありません。冬の木々草花のように、じっと我慢の時なのかもしれません。阿彌陀様は、そんな私たちと片時も離れません。南無阿彌陀仏、と、声の仏様と成って、ご一緒にくださっています。それだけでも勿体ないことなのに、ありとあらゆる世界の仏様方までも、私たちをおまもりくださるのです。決して独りぼっちではないのです。

南無阿彌陀仏 南無阿彌陀仏